

令和4年度 和歌山県農林大学校農学部 学校評価シート

教育目標

高度な専門知識と技術並びに幅広い視野と豊かな人間性をもった明日の和歌山県の農業を担う人材の育成

今年度の重点目標

- 1 学生の確保
- 2 教育活動の充実・強化
- 3 進路支援の強化
- 4 情報発信の充実

評価基準

- 【評価区分・5段階】
- 5:当初目標を十分達成した(101%以上)
 - 4:当初目標をほぼ達成した(81~100%)
 - 3:当初目標を概ね達成した(61~80%)
 - 2:当初目標の半分程度達成した(41~60%)
 - 1:当初目標をほとんど達成できなかった(40%以下)

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組		内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント												
			計画	実績																
1 学生の確保	<p>○平成以降入学者の定員割れが続いている</p> <p>○直近5年は年平均18名と低迷(受験者数22名)</p> <p>定員40名 ↓ 実績:18.4名(H30~R4平均)</p> <p>出身高校の属性(H30~R4) 農業42%、総合16%、普通32%、商工業10%</p> <p>○県外からの入学生は増加直近5年は毎年県外からの学生が入学年平均4.4名。</p> <p>(県内外の属性(H30~R4)) 県内74%、県外26%</p> <p>○アグリビジネス学科(H29新設)の入学者も低迷</p> <p>定員10名 ↓ R4年度3名(H29:8名、H30:5名、R1:0名、R2:4名、R3:2名)</p>	<p>【令和5年度入学生:32名確保】 園芸学科:24名 アグリビジネス学科:8名</p> <p>○高校へのアプローチ ・学校訪問 ・資料送付 ・高校職員の関係会議でPR</p>	<p>○学校紹介と学生募集活動の展開 ・受験者数の確保 36名以上(入学生/受験生=約9割)</p> <p>・教育委員会との連携による高校訪問(事前に県立学校教育課長から県内全高校へ協力依頼文を发出のうえ、集中訪問を実施) ↓ 学校訪問巡回回数 4巡 6月、9月、11月、1月 延べ140校(県内130校 県外10校)</p> <p>学校パンフレット、農学部紹介チラシ、オープンキャンパス案内を持参園芸学科、アグリビジネス学科それぞれの特徴を巡回説明</p> <p>・募集要項、学校案内等の送付(4月)</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>募集要項</td> <td>学校案内</td> </tr> <tr> <td>県内</td> <td>50校 211部</td> <td>255部</td> </tr> <tr> <td>県外</td> <td>302校 278部</td> <td>342部</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>489部</td> <td>597部</td> </tr> </table> <p>・教育関係首長会への出席、農大概要説明(校長、副校長) 教頭会議 5月10日 募集要項 110部を配布 進路指導部長会議 5月13日 副校長説明 70部を配布 進路指導研究会等 9月 //</p>		募集要項	学校案内	県内	50校 211部	255部	県外	302校 278部	342部	計	489部	597部	<p>受験者数の確保 15名(入学生/受験生=約8割)</p> <p>学校訪問巡回回数 4巡 1巡 6月21日、22日、24日、28日、30日、7月1日 2巡 9月7日、9日、13日、14日 3巡 10月21日、26日(電話1校)、11月9日 4巡 1月23日、25日、27日(電話7校) 延べ80校(県内70校 県外10校)</p> <p>計画どおり説明を行った</p> <p>計画どおりに実施</p> <p>教頭会議 5月10日 校長説明 110部を配布 進路指導部長会議 5月13日 副校長説明 70部を配布 進路指導研究会等 7月11日 //</p>	3	<p>・非農家出身の受験生は増加傾向で就職に関心が高い</p> <p>・本校の多彩な就職先や高い就職率を強調</p> <p>・県内外の高校に引き続き巡回説明で受験者数確保</p>	3	<p>平成以降、入学者の定員割れが続く、特にアグリビジネス学科への入学者が少ないことは深刻に受け止めなければならない。</p> <p>しかし、入学者の属性で約半数が農業系以外の高校から進学していること、非農家出身の入学者が増加傾向であること、主として大阪府からであるが、県外からの入学者が直近5年間の平均で4.4人いることも注目すべきことである。</p> <p>取り組みは幅広く展開され、受験者確保に努めている。</p> <p>より魅力ある出口確保に努めてほしい。</p> <p>農林大学校の問題としてだけではなく、和歌山県農林業の方向性、人口減少に伴う就学人口の減少も含めての課題である。</p>
				募集要項	学校案内															
			県内	50校 211部	255部															
県外	302校 278部	342部																		
計	489部	597部																		
<p>○チラシ配布やHPなどにより事前告知を強化</p> <p>・7、8月に3回開催(7/9(土) 8/2(火) 8/9(火))</p> <p>・3月に2回実施</p> <p>・参加者に「入試想定問題」を配布するとともに、職員からスマート農業、GAP演習の取組みを、学生から農大生活等を紹介</p>	<p>計画どおりに実施</p> <p>・3月に1回実施予定(3/19) 開催日を平日から休日に変更</p> <p>・計画どおりに実施</p>	3	<p>・参加者の利便性を高め参加者を増やす 人数制限を撤廃 開催日を全て土日に変更</p>	3	<p>広報活動は職員は多大なエネルギーを使って行っている。オープンキャンパスも内容を工夫を凝らし積極的に行っている。</p>															
<p>○農業系高校との連携強化と出前授業の実施</p>	<p>○県内農業系4高校との連携強化</p> <p>・「高大連携プロジェクト」(R3新規事業)の推進 農業系4高校(紀北農芸、有田中央、南部、熊野)と農林大学校が専門的な授業等で連携することにより、5年一貫の教育システムを構築する事業 農業系4校において農大カリキュラム「概論」「農業経営」に値するカリキュラムを強化→評定5の生徒(特待生)は上記2科目免除を検討中(R7~入学生を想定)</p> <p>・高校からの依頼に基づき、リモート発表を開催 プロジェクト研究を発表紹介(本校発表会 12/14) 卒業論文発表会(2/14)</p> <p>○出前授業の実施</p> <p>・本校職員が高校からの依頼内容に基づき高校での授業を実施 「和歌山県の農業」 「農業の魅力と農林大学校」 「就農支援制度」等</p>	<p>【5~7月】 農業系高校4校を訪問し、接続プロジェクトテーマについて意見交換、農場見学、授業見学</p> <p>【10月】 本校で農業系高校4校と意見交換</p> <p>【11~12月】 各高校が作成したプロジェクトシート内容に助言</p> <p>・日程が合わず未実施</p> <p>2校で実施 11月1日:南部高校 1年生 35名 12月2日:熊野高校 1年生 132名</p>				3	<p>・各農業系高校と連携を一層強化</p> <p>・接続プロジェクト、高校で学んだ基礎科目免除、成績優秀者の授業料免除等、免除基準の詳細の検討</p> <p>・職員同士の交流により、授業、実習の指導レベル確認</p> <p>・職員同士の技術レベル向上</p> <p>・接続プロジェクトの対応準備 関連品種(果樹)の導入</p>	3	<p>本学校が何を学ばせたいのか、本学校で何を学びたいのかの教育目標を明確にし、本学校を魅力的な学校にするための検討が必要である。</p> <p>教育内容を精査することにより、資格習得、卒業後の進路、就職への動機づけも大切である。</p>											
<p>《評価》</p> <p>・学校紹介や学生募集活動を行ったが、令和5年度入学生の確保は11名(園芸学科:11名 アグリビジネス学科:0名)にとどまった</p> <p>・高校へのアプローチは当初の計画どおりに実施できた(学校訪問:県内外延べ80校、電話による受験依頼)</p>	<p>《評価》</p> <p>・7~8月に参加した21名(R3:20名)のうち、12名(約6割)が受験</p> <p>・オープンキャンパスの参加者を制限したことで参加者を増やすことができなかった</p>	<p>《評価》</p> <p>・農業系高校職員との交流等により連携強化を図った</p>																		

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組		内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
			計画	実績				
		○アグリビジネス学科のPR	○農学部パンフレット、アグリビジネス学科PR資料配布説明 アグリビジネス学科は園芸学科と同様に専攻実習を実施のうえ、さらに、マーケティング、加工品開発等の技術を習得する2年間のカリキュラムを詳細に説明	・県内外の学校訪問時に、各学科を丁寧に説明、 ・教頭会議 5月10日 校長説明 110部を配布【再掲】 進路指導部長会議 5月13日 副校長説明 70部を配布 進路指導研究会等 7月11日 //	3	・アグリビジネス学科生の減少が続いていることから、引き続き学校訪問等で学科カリキュラムの特徴を丁寧に説明	3	アグリビジネス学科を活性化すべきであり、内容を含め検討が必要である。
			《評価》 ・R5年度アグリビジネス学科入学生0名(R4:3名) ・学校訪問や高校の教頭会議等に出向いてPR資料を配布説明した					
2 教育活動の充実強化	○スマート農業の振興など農業を取り巻く情勢は刻々と変化 ○一方、本校学生の属性も多様化 ・学生の属性(H30～R4) 専業農家 18% 兼業農家 22% 非農家 60% (H25～H29) 専業農家 27% 兼業農家 28% 非農家 45% ・出身高校(H30～R4) 農業42%、総合16%、普通32%、商工業10% ○学生間に基礎学力の開きがある ○資格取得率(H29～R3実績) ・大型特殊自動車(農耕用):100% ・園芸技術:69% ・農業技術検定2級:16% ・農業簿記3級:44% ・危険物乙四:16% ・毒劇物:3% ・狩猟免許(わな猟):78%	○時代の流れに即した授業の実践 ・授業期間の組み換え	【授業期間の組換え】 ○スマート農業機械演習《2年 前期:20時限》 スマート農機演習を前期に変更し、学生の操作技術等を早期に習得させる →専攻実習で農業散布ドローン、リモコン草刈機、スピードスプレー等の活用を高めることで、実践力を強化する	・1年生、2年生合同で3班に分けて、4月、5月、12月に演習を実施	4	・スマート農業機械演習は、1年生時での履修に変更 1年次:科目「GAP」でGAPの基礎を学ぶ15時間(1回90分×7回)+試験 2年次:「GAP演習」を通じて認証取得に向けた実践教育を実施 審査に向けた演習 30時間(1回180分×10回) ・法人設立に関する学習を引き続き実施	4	本学校においても状況の変化に応じ様々な改革を進めていることは伺える。 多様化する技術に関するカリキュラムを多く提供し、学生の趣味、得意分野を伸ばし、やる気を助長する環境の提供が必要である。
			○GAP(農業生産工程管理)の実践教育《2年 48時限》 国庫事業を活用し、令和2年度「カキ」、3年度「トマト」のグローバルGAPの認証継続 GAP演習を通じて、認証取得に向けた実践教育を実施する	計画どおり実施				
			○起業演習《2年アグリビジネス学科 45時限》 店舗運営に限らず、起業や組織運営等に学習領域を広げた授業を実施	・2年生2名に対し、起業の実践的な学習を実施 株式会社設立手続き、外部講師による演習				
			《評価》 ・スマート農業機械の構造と取扱い等の習得 ・カキとトマトのグローバルGAP認証を継続取得(11月11日付け) ・花きで新たにMPS-ABC認証を取得(1月17日付け) ・会社設立の手続きを学生自らが取組むことで、経営者感覚の向上					
		○資格取得率向上を目指した取組 ・資格取得率 大型特殊自動車(農耕用):100% 園芸技術(2年):80% 農業技術検定2級(2年):30% 農業簿記検定3級(2年):70% 危険物(1年):40% 毒劇物(1年):30% 狩猟免許【わな猟】(2年):90%	○園芸技術、農業技術検定 自習時間の新設(希望生→全学生)《2年 16時限》 資格試験直前の集中講義を編成(「資格取得対策」の新設) 模擬試験の実施(2回)	計画どおり実施	3	・資格試験直前の集中講座を引き続き実施 ・園芸技術員資格試験と農業技術検定試験の前は、「資格取得対策」と「園芸技術」による集中講義を実施 ・他の資格試験は引き続き「資格取得対策」で対応 ・専攻実習に影響を及ぼさないよう授業日を分散	3	各種資格に対する学生の対応が低調ようである。取得した資格が将来の仕事にどのように役立つか、その資格を取得するためにはどのような準備をするのか、などの教育が必要である。高等学校までの基礎学力が影響することではなく、目標に向けた新たな勉強への熱意と方法を指導することが望まれる。 教職員は資格取得に向けて適切な指導を行っているので、時代の流れに即した資格を取得できるよう、さらなる充実を工夫していただきたい。 受験準備のために専攻実習の時間が不足し、適期の栽培管理に支障を及ぼすことに対してはどのように対処すべきかの議論が必要である。
○農業簿記検定 《2年 15時限》→《2年 21時限》 模擬試験の実施(2回)	同上							
○危険物・毒劇物 外部講師を招聘(R1～) 1年次不合格者に対して2年次の再チャレンジ(R2～) 職員による補習授業の実施(R2～) 過去問題を徹底解説し、個別指導の強化で対応	同上							
			《評価》 ・R4資格取得率(R3) 園芸技術:88%(68%)、農業技術検定2級:23%(28%)、農業簿記3級:57%(50%)、狩猟免許(わな猟):92%(89%)、危険物:7%(24%)、毒劇物:0%(0%) ・園芸技術、農業簿記、狩猟免許は合格率が向上、毒劇物は昨年に引き続き合格者0でありR5は過去問題を徹底解説し個別指導の徹底を図る必要がある ・専攻実習の時間が不足し、適期の栽培管理に支障を及ぼした					

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組		内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
			計画	実績				
		○魅力ある教育の実践(その1) ・スマート農業関連技術の導入	○ICT機器をミニトマト、メロン、バラロックワールハウスへ設置(R1) ○制御ノード設置によりハウス環境制御装置の一括管理が可(R2) ○外気象ノード設置により、天候に順応した自動環境制御を実現(R2) ○自動環境制御が可能となった3ハウスをケーブル接続し、クラウド連携によるスマートフォンでの一括管理を実現(R2) ○イチゴ高設栽培ハウスへ環境制御装置を導入(R3) ○自動環境制御を活用した「ミニトマト」増収栽培技術の習得をプロジェクト学習で、「ガーベラ」の高品質生産技術の習得を専攻実習を通じて実践(ミニトマトR3～、ガーベラR4～) ○プロジェクト学習として、蓄積された施設内環境の測定データを活用し、収穫予想された日数と実際の開花～収穫までの日数の比較を行う	実施済み	3	・スマート農業関連技術を導入することによる効果について学生に理解させる手法および職員の知識・技術向上	4	自動環境制御温室、ドローンの操縦、リモコン草刈り機、スピードスプレヤーなどスマート農業に対する様々な作業の形態を導入し、学生に提供することにより、学生の意欲を高める工夫を行っている。 魅力ある教育としてスマート農業を今後どう展開をしていくか検討が必要である。
		○魅力ある教育の実践(その2) ・GAPの取組を加速化	○GAP演習の授業導入 国庫事業を活用し、コンサルティング会社から外部講師を招聘しグローバルGAP認証取得に必要な知識、技術を習得させる ○グローバルGAP認証継続のための職員指導体制の強化 ・外部講師依存度を減少(12回→9回)させ、職員の指導スキルを向上 ↓ ・職員が日常的に指導できる体制を整備 ↓ ・学生がGAP実践の知識や技術を容易に習得 ○果樹・野菜・花き全コースでGAP農業の取組みを強化 ・グローバルGAP(カキ、トマト)【継続】 ・MPS-ABC認証取得(花き)【新規】 ○GAP認証品の販路拡大 ・カキの輸出版売 ・カキの国内販売(店舗でのテスト販売)	計画どおりに実施 ・職員7名が12回の講義に参加、最初3回を職員のみで指導、GAP内容の理解と指導スキルを向上 ・審査終了後も各コース長を中心に指導を継続 ・学生の8割以上がGAPを理解している(資料9参照)	4	・グローバルGAPを農林大学の水準として確立させる GAPの日常的な実践 農学部職員全員が、指導できる体制に移行 ・教育機関としての役割、地域のGAP導入モデルとしての役割を果たしていく 認証取得の継続(学生主体) 認証審査を地域農業者等に積極公開 ・情報発信 HP、学生募集パンフレット等 高校生をはじめ若年代を対象 ・GAP認証農産物のPR 学生にGAPの価値を認識させる 消費者へのGAP認知度を向上	4	個々の技術に加え、グローバルGAP、MPS-ABC認定などの核となる目標を掲げ、それを支える周辺の知識、技術の教育も大切である。本学校では核となるプロジェクトに対し、プロジェクトを構成する様々な分野に責任を持たせ、学生の自覚を促すような教育を行っている。 グローバルGAP、MPS-ABC認定は本学校を特徴づける重要な教育目標の一つであり、継続していただきたい。このようなプロジェクトにかかわったことを社会にもアピールし、卒業後の自信となるようつなげることが大切である。 GAPへの取り組みは他県でも増えてきているなかで、毎年新しい取り組みにチャレンジしていることは評価できる。
		○魅力ある教育の実践(その3) ・模擬会社の設立、学生運営	○「起業演習」で起業から組織運営についての知識を習得 ○模擬会社を合同会社形式で社名「わかやま農大学生会社」として6月の設立を目指す 学生が会社員となり、代表生が役員に就任、生産から仕入れ、販売までの運営を自ら行う	・定款作成や税務署手続きについて学習(9～1月) ・模擬会社の運営資金の工面に課題があり設立が遅れている ・販売実習のための施設を整備中(年度内完了予定)	2	・次年度早々に事務を進め、学生への説明と教育を適切に行うとともに進行管理を徹底する	2	模擬会社設立は予定より遅れているようであるが、断念したいということではなく、継続的に実現に向けて準備を進めているので、各種障害を乗り越えながら模擬会社として学生が参画並びに主体となって運営できるよう、設立の実現に向けて努力していただきたい。
			《評価》 ・学生自らの取り組みによって認証を取得し、学生全員をGAP等を実践できる人材に育成した ・7名の職員がコンサルティング会社の指導者の講義等も含め12回の学習に立ち合い、職員自らの指導力強化を図った ・農林大学のGAPレベル(柿、トマト)をグローバルGAPまで高め継続している ・「令和4年度未来につながる持続可能な農業推進コンクール」で近畿農政局長賞を受賞 ・2月10日に日本GAP協会主催のシンポジウムが開催され講演者として職員が参加、本校でのGAP指導の取り組みを報告(参加者130名)					
			《評価》 ・模擬会社運営については、定款作成や税務署手続きの学習により進めているが、模擬会社の設立には至らなかった。					

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組		内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
			計画	実績				
3 進路支援の強化	<p>○非農家出身の学生が増え就職に関する指導や就職先の開拓などきめ細やかな対応が必要 加えて学生の多様化により卒業後の進路や学校生活に不安を感じる者が現れる傾向がある。</p> <p>○就職試験の時期が早まっていることから、学生の就職活動は1年生後半には準備を始める必要がある。</p> <p>○1年生における就業意識は未だ低く、早期から積極的に活動する学生は一部である。</p> <p>○卒業時の進路確定率 97% (H28～R2)</p>	<p>○将来設計能力の養成 ・授業科目の変更 ・インターンシップ研修時期の改善</p>	<p>○進路支援強化に向けた授業の再編 ・キャリアデザイン授業(1年生)の導入 学生が主体的に、人生と職業、キャリアプランを思索するため専門外部講師と職員連携による授業を実施</p> <p>・上記授業の中で、就農予定者には卒業後の営農モデルを設計させ、経営展開の計画性を高める</p> <p>《評価》 ・進路選択に向けた意識の醸成 ・ハローワークと連携し就職支援に関する講義を行うことで就職活動のスキルアップにつながった</p>	<p>・1年生を対象に進路選択の動機づけとして、ハローワーク(HW)と連携した就職支援に関する講義を12月まで5回実施 9/12 厚生労働省委託事業による就職ガイダンス 10/3 職業理解と働く意義(HW橋本) 10/17 就活に向けたスーツの着こなし(洋服の青山) 12/6 就活について(HW橋本) 12/12 ビジネスマナー、面接対策(HW橋本) ・インターネット、情報リテラシー、消費者教育の講義を実施</p> <p>・1年生次では就農、就職の進路が定まらなかったことから、営農モデル設計は未実施。</p>	3	引き続き実施	3	農業系課程以外からの学生、非農家出身の学生の比率が増える傾向があり、農業後継者以外の進路の提供が必要となってきた。とは言うものの、流通、食品、農業機械など農業関連の業種への進路指導に重点を置き、本学校が和歌山県の農業全般に貢献していることをアピールすることが大切である。 就職活動の開始が2年次前期に早まっているので、就職に対する動機付けをどの段階から開始するのか、の問題はある。しかし、卒業するまでには97%(R4年:14人中、13人)の就職内定率があるので、学生は、最終的には何とかできるだろうと、楽観的に考えているのではないだろうか。
		<p>○ハローワークとの連携強化</p> <p>○個別面談による進路指導 ○求職情報の常時提供</p> <p>○学校と専門カウンセラー、保護者3者による伴走型支援の実施</p>	<p>○ハローワーク(HW)からの講師派遣 ・求人票から見る就労条件のポイント ・就職面談に有利なエントリーシートの作成 ・HW職員による模擬面接の実施</p> <p>○個別面談の実施(進路指導職員、担任との2者面談) ・新規参入希望生へは「新規就農受入協議会」との連携を密に図り、県内の就農定着を支援する ・保護者との連携を密に学生の学力向上と進路意識の醸成を双方から指導支援する</p> <p>【1年生】 5～6月 進路状況調査・2者面談 9月 3者面談 1月 HW講師による模擬面接</p> <p>【2年生】 4月:就職活動動向調査、二者面談 7月:非内定者への就職支援 随時:進路指導、職員による模擬面接</p> <p>・5月にアンケート調査をおこない、悩みがちな学生には、保護者とカウンセラーと連携しながら、早期サポートをおこなう</p> <p>《評価》 ・2年生14名中13名が進路確定 ・ハローワーク、進路指導職員、担任による模擬面接を行うことで就職活動のスキルアップにつながった</p>	<p>【再掲】 10/3 職業理解と働く意義(HW橋本) 12/6 就活について(HW橋本) 12/12 ビジネスマナー、面接対策(HW橋本)</p> <p>・希望者がいなかったことから未実施</p> <p>【1年生】 進路状況調査・2者面談 5月11日～12日、8月24日 3者面談:10月14日～26日 HW講師による模擬面接:12月12日</p> <p>【2年生】 ・就職活動動向調査、2者面談 4月4日、4月下旬、5月、6月、11月、2月に実施 ・就職の決まらない学生に随時面談を実施 ・就職面接の予定している学生に随時模擬面接を実施</p> <p>・面接において悩みがちな学生がなかったことから5月のアンケート調査は実施せず、その後の面接において十分な時間を確保して相談に応じることとした</p>	3	<p>・進路指導は保護者との連携を密に学生の学力向上と進路意識の醸成を双方から指導支援</p> <p>・新規参入希望生は「新規就農受入協議会」の活用を促す</p>	3	
		<p>○就職ガイダンスの開催 対象:1年生 時期:3月</p> <p>○ガイダンスを通じた早期就職活動の実施</p>	<p>○本校1年生を対象に、紀北農芸高校との共同開催として企画 JA、農業法人、農業関連企業等を招請し、学生の進路決定の一助とする</p> <p>《評価》 ・農業関係企業16社からの説明を聞くことができ、進路を考えるための一助となった</p>	<p>・3月6日に実施(参加企業 16社) 農林大学校学生14名、紀北農芸高校生徒57名参加</p>	3	引き続き実施	3	学校側としては、キャリアデザインの講義、紀北農芸高等学校との就職ガイダンスの開催、保護者との密な連携、情報収集など様々な工夫を凝らし、就職対策を行っている。
4 情報発信の充実	<p>○農林大学校が一般に十分認識されていない</p> <p>○ホームページ等を通じた情報発信</p> <p>○地域における効果的な情報発信関係機関(市町、JAなど)や地元民間企業(JR、スーパー等)を通じた和農林大情報の発信</p>	<p>○ホームページによる農林大学校の魅力発信</p>	<p>○農大ブログと併せて、きめ細かな情報を発信 ・県ホームページ更新30回 ・ブログ掲載 50回</p> <p>《評価》 ・県ホームページやブログで日常の学生活動や学校生活をタイムリーに発信することで本校の魅力をPRできた</p>	<p>・県ホームページ更新30回(入学試験、和農市、オープンキャンパス等) ・ブログ掲載 48回(日常の学生活動、学校生活等) (約2,000アクセス/月)</p>	3	引き続き実施	3	県のホームページによる広報、本学校独自のプログラム更新など積極的に行っている。また、マスメディアを通じての各種行事、イベントなどの情報発信も和歌山県の各事業関係機関より高い頻度で取り上げられている。今後もSNSの利用や露出拡大、より効果の上がる方法を研究しながら進むことを期待している。
		<p>○マスメディア等を通じた情報発信</p>	<p>○プレスリリース回数 12回 ○広報誌 10回</p> <p>《評価》 ・メディアを通じた情報発信を強化。 ・テレビ、ラジオ 24回(R3年12回)、県関係誌 20回(R3年6回)、県公式SNS 12回(R3年8回)</p>	<p>・プレスリリース回数 14回 (学生・研修生募集、一般入試、オープンキャンパス等) ・広報誌 7回(県民の友3、2JA、2市町)</p>	3	引き続き実施	3	
		<p>○市町(経営支援課協力)、JA等関係機関に対して広報誌やホームページへの記事掲載、ポスター掲示を要請 26カ所(市町18、JA8)</p> <p>○民間企業へのポスター掲示を要請 50カ所</p> <p>《評価》 ・市町やJA等関係機関に対して広報誌やホームページへの記事掲載要請回数は計画を上回るなど、情報発信の強化を図った</p>	<p>・47カ所(市町村延べ30、JA延べ11) ・3月6日に農業関連企業16社に掲示要請</p>	3	引き続き実施	3		